

# ラオス研修を終えて

4年次 074160E 千葉卓

この度は学生の身でありながら、ラオスでの貴重なボランティア活動に参加させていただき、本当にありがとうございました。

今回のラオス研修は、首都ビエンチャンと北部にあるウドムサイの2か所で行われました。私は学校の実習で手術室に何度か入った経験があり、途上国であるラオスの地方および首都の病院が日本とどう違うかをみるというのを一つのテーマにあげていました。そこでは導尿を行わず、麻酔の導入も日本でよく使うようなフェンタニルではなくセボフルランであり、何よりも口唇裂、口蓋裂の手術を受ける患者が10代、20代またはそれ以上であることに驚きました。口唇裂、口蓋裂の手術の目的は生命を救うといった医療ではなく、QOLの改善を目的とした医療です。そういった医療を受けられない人がラオスには大勢いることを体感し、ラオスなどの途上国の生活水準はどのくらいであろうかと疑問に思いました。ウドムサイからバスでブアンパパンへ行く途中に、高床式の家を何度も見ました。また、道路も下水道が全く見られず、雨期になればきっと汚水が流れ出てくるんだろうなと推測することができ、それゆえにマラリアをもった蚊やボウフラが多く発生するのだろうと思いました。

今回の症例数は36件を超え、過去最高であったとおうかがいしました。沖縄県の一年間の症例数が口唇裂、口蓋裂含めて30~40件であり、それを2週間で行ったのはすごいことだと思います。実際、現場は多忙を極め、それでも要領よく手術をこなしていく先生方から医療従事者のあるべき姿をひしひしと感じました。手術室でやってはいけないことや注意すべきこと、手洗いや薬品、器具の扱い方など多くのことをご指導してくださり、ポリクリの先取り学習をすることができました。

今回の症例の中に、口唇裂を行った子どもがいました。印象深かったのは術前にその子とお母さんが二人で泣いていたことでした。口唇口蓋裂の手術は命の危険性がないといえるものではないですが、安全性が高いと聞いています。もちろん、お母さんにもそれは伝わっていました。子を思う母の気持ちはどこに行っても変わらないと感じました。手術の翌日、通訳さんを介してインタビューをしてみました。感謝と敬意の気持ちが言葉だけでなく、表情からも汲み取ることができました。これこそ医療の原点ではあろうと認識しました。

学生交流では、ラオスの学生のコミュニケーション能力の高さに感心し、同時に自分自身の英語力の無さを痛感しました。日本で医療活動をするにしても論文作成や資料読解には英語力が必要であると聞きます。医学的知識のみを勉強するのではなく、学生生活の間で語学力向上に向けて、何かしらの対策をとる必要があると認識しました。しかし、ラオス

の学生に勉強や生活について話しましたが、やはり通じるものがあったことに感激しました。

ラオスを研修する前、「日本との相違点」を見つけることを大きなテーマにしていました。医療の質の違いを感じる以上に、国力の差を感じました。医療援助でラオスに CT や MRI などを設置するよりも、聴診器をその分だけ送ったほうがよいのではないかと思いました。私は将来、沖縄に残り地域医療をしていきたいと考えており、今回のラオス研修ではその参考になるのではないかという期待がありました。しかし、ラオスではしっかりした医療体制を整備する前に、社会基盤を構築する必要があると思いました。同時に日本の医療は充実しており、後は足りないところを補足する段階にいることを感じました。おそらく私が医師として働いている間に地域医療の体制も今以上に充実したものになっていると思います。

最後になりますが、ラオス研修という貴重な体験に行く機会と許可をくださった佐藤良也医学部長、砂川元医学科長を始め、多くの医療従事者の皆様に感謝を申し上げます。今後の医療活動に役立て、努力していきたいです。